



パークシティ沖縄—海洋博公園の取り組みと役割

文・写真・後藤和夫（内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所長）

沖縄美ら海水族館の圧倒的人気もあり、海洋博公園の昨年度入園者数は過去最多の308万人となった。

来園者が沖縄本島の北部地域で消費した金額は740億円、経済波及効果1268億円に達する。

開園30年を迎えた公園の利用者は累計で5300万人。

羽田从那覇まで2時間30分、那覇から公園までさらに2時間もかかる。

交通費が高く遠いという逆境の立地条件の公園が、何故利用されているのか、その背景と役割を、

公園計画、管理運営の立場から紹介し、公園のこれからのプランを語ってもらおう。

公園が果たした役割

公園はさまざまな役割を演じることができる。海洋博公園もこれまでに、観光客を呼び込み、地域の観光産業振興や雇用創出に大きな効果を及ぼす上、その利用を通じて、琉球王国の歴史や沖縄の生活文化、黒潮の海や海洋生物、亜熱帯地方の花果実など「沖縄」を体感できる場となってきた。まずは、それら海洋博公園がこれまで果たしてきた役割と背景を説明していこう。

海洋博公園（国営沖縄記念公園）

沖縄の人気観光スポット、首里城、沖縄美ら海水族館、エメラルドビーチ…。沖縄観光の目玉施設として多くの方に親しまれているが、いずれも国営沖縄記念公園だ。

1975年開催の沖縄国際海洋博覧会の会場跡地に整備しているのが、通称海洋博公園。450年間続いた琉球王国のシンボルで沖縄戦により焼失した首里城の復元整備をしているのが首里城公園。

90km離れた二つの公園を併せて国営沖縄記念公園とし、公園の役割は、沖縄の歴史資源と自然資源を生かし、国の英知をフルに発揮して整備するとともに持続的で効果的な管理運営を進めることにより、琉球文化の発展と沖縄振興に資するよう努力をしてきた。

観光政策と国営公園

2006年度の公園の利用者数は、海洋博公園が308万人、首里城公園が267万人となり、合計575万人である。これは、県外から沖縄



海洋博公園の中央ゲートから伊江島を望む。

東シナ海に浮かぶ伊江島を生かした景観設計をしているのがこの公園の特徴。沖縄美ら海水族館でも伊江島を巧みに取り入れている

へ訪れる観光客数570万人を上回り、136万人の県人口の4倍に相当する。県民の公園利用と重複利用を差し引くと、本県への観光客の約75%が国営公園を利用していると推計される。観光客の誘致を目指す沖縄にとって公園が大きなけん引役を果たしていることがわかる。県が実施した観光統計実態調査では、観光客の立ち寄り先の第1位は那覇市国際通り、第2位に首里城、第3位に海洋博公園となっている。

国内唯一の地上戦の結果、長らく米軍占

領下にあった沖縄県が日本に復帰したのが1972年。直ちに政府は発展が遅れていた本島北部地域で1975年に沖縄国際海洋博覧会開催を決定した。そして会場跡地を国営公園にする閣議決定を博覧会開会前に行った。博覧会の開催期間は半年間だが、沖縄自動車道、国・県道など幹線道路網の整備、水源や治水対策などのダム建設、上下水道整備、ホテル・観光関連施設の立地など観光インフラの整備を生かし、持続的に観光客を誘致するために国営公園とすることが必要だ



エメラルドビーチ

日本の水泳場100選の一つ。年間利用者は20万人。潮流の流れを調査して作られた人工ビーチ。美しいカーブを描き、先端に樹木が植わる突堤は画期的で日本の海岸事業を変えたといわれる。日本サッカー協会主催によりビーチサッカーの全国大会も開催された



熱帯ドリームセンター

東南アジア、中南米、アフリカの熱帯地方のイメージを再現・創造する花と熱帯植物の殿堂。1700種類のランをはじめ、珍しい熱帯花木、果樹がある。水族館利用者は料金が半額になる



沖縄美ら海水族館

世界最大のアクリルパネル越しに見るマンタ、ジンベエザメがゆったりと泳ぐ姿は、心が癒される。年間利用者は258万人。4年間で入館者は1000万人を突破した。水族館の目の前を流れる黒潮の海流を、直接水槽に引き込むことができる立地条件と、30年間培った飼育技術が魅力を支えている

った。5300万人の快挙は、国・県・市町村・民間企業・県民・関連団体が沖縄振興のために総合的に取り組んだ成果といえよう。

沖縄振興における観光政策

今年は沖縄県が本土復帰して35年になるが、県民所得は未だに全国の70%水準で、復帰以降全国最下位を続けている。唯一、博覧会開催年に46位になっただけで、沖縄振興は依然としてわが国の大きな課題だ。

遠隔地であり交通条件等から新たな産業

立地が難しいこと、本島面積の20%が米軍基地に占有されていることなどが原因として挙げられているが、沖縄には本土にない素晴らしい自然と、琉球王国の輝かしい歴史資源や沖縄の伝統的生活文化がある。これらを十分に生かし、観光政策を推進することが重要だ。

県内の観光産業が生み出す付加価値の総額を観光GDPと呼ぶが、観光GDPは1956億円と推計され、県民経済計算の2002年度県内総生産と比較すると、観光GDPは5.6%

のシェアを占め、製造業や金融保険業よりも産業規模が大きい。また、観光産業における雇用者数である観光雇用は47,000人と推計され、労働力調査の2004年度の県内産業別就業者数と比較すると、観光雇用は8.5%のシェアを占め、農林水産業や製造業よりも産業規模が大きい。(いずれも出典は平成16年度沖縄県観光統計実態調査)

若い人が進学や就職の機会に所得や雇用条件の悪い故郷の沖縄を離れざるをえない現象が続くと、沖縄振興の実現は遠い。

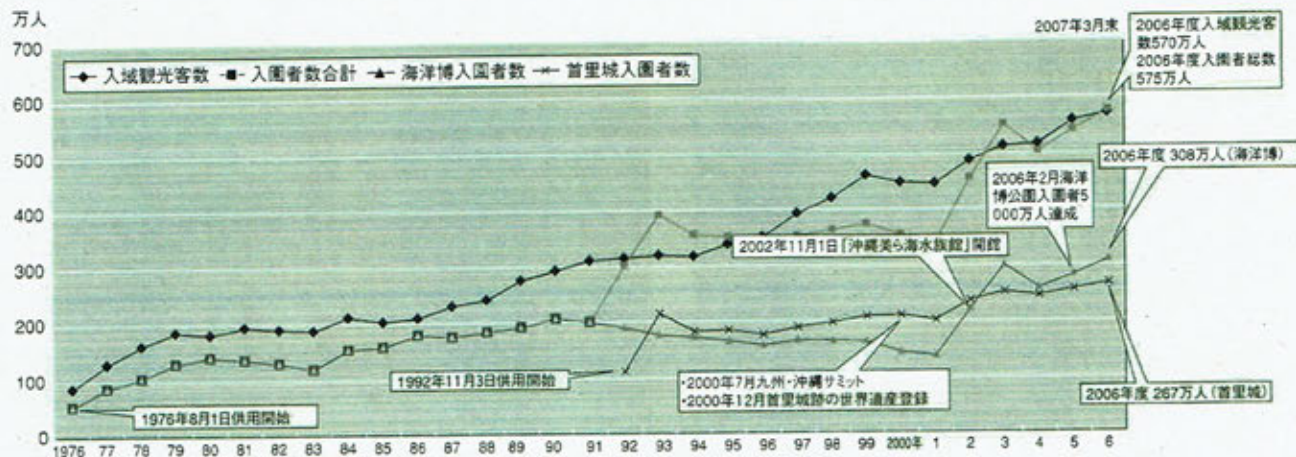


図1 国営沖縄記念公園(海洋博覧会地区・首里城地区)入園状況

観光立県を目指している沖縄県においては、美しい県土を創造することによって、本土から多くの方に継続的に来県していただくとともに、若い人が誇りを持って働く場所を確保できるよう努力を続けていく必要がある。

観光増のための取り組み

沖縄国際海洋博覧会が閉幕した半年後の1976年8月に、撤去施設などの工事を終えて国営公園は開園した(以下、図1参照)。美しい弧を描き、先端に木が植えられている白砂のエメラルドビーチは南国情緒豊かで大人気だが、緻密な海流調査に基づき砂浜を維持しており、それまで直線的に折れ曲がる突堤しかなかったわが国の海岸事業を変革したといわれている。ミクロネシアの古代船を再現し、アジア南太平洋地域における人間と海のかかわりを展示した海洋文化館、イルカが自在に空を飛びオキちゃん劇場、水族館など博覧会の政府出展施設が人気施設だった。開園した年の利用者数は54万人。沖縄県への観光客数が86万人であった(観光客数に対する比率は63%)。

その後、公園事業として、子供たちに大人気の「ちびっことりで」など公園として必要な施設を整備するとともに、安全と快適を重視した管理運営を続けて、利用者数は増加していった。1984年度の利用者数は150万人に、観光客数は210万人(同71%)になった。開園10年の1986年には、ランや熱帯花木の咲き乱れる東南アジア、中南米、アフリカなどの熱帯地方のイメージを再現する熱帯ドリームセンターが完成し、利用者数は179万人、

観光客数は210万人となった(同85%)。

さらに熱帯・亜熱帯都市緑化植物園など沖縄の亜熱帯植物を多数展示する施設が完成し、1990年のピーク時には207万人まで増えたが、公園整備が一段落すると利用者は漸減し、2001年度には139万人(同31%)まで減少した。

その一方、沖縄復帰記念事業としての閣議決定を受け、首里城整備に着手することになり、公園事務所は、自然を相手にした事業内容から、琉球王国の文化財発掘調査や歴史的建造物の復元、琉球と諸外国との文化交流など新たなテーマに取り組むこととなった。そして閣議決定から6年後、沖縄復帰20年の1992年11月には首里城正殿、北殿、南殿の完成にこぎつけた。これにより首里城は、戦災で焼失した琉球王国のシンボルを復元した新たな観光拠点となった。那覇市内という立地条件にも恵まれ、年間250万人の利用者数が得られている。2006年秋には開園14年間で利用者数が累計3000万人を突破した。

首里城開園以降は、海洋博公園と首里城公園が沖縄観光の二大拠点となり、海洋博公園への観光客数比率は2001年には相対的に31%まで低下した。こうした中、沖縄復帰30年である2002年11月に公園内にリニューアルオープンした「沖縄美ら(ちゅら)海水族館」は爆発的な人気を博した。沖縄旅行商品のパンフレットのほとんどに紹介され、海洋博公園の利用者数は139万人(同31%)から平成18年度には308万人(54%)へと倍増した。沖縄美ら海水族館は、世界最大級

の水槽を保有し、巨大なジンベエザメと世界最大のエイであるマンタの複数飼育という他の水族館の追従を許さない、スケールの大きな魅力をもつ。単なる展示だけでなく、繁殖による未知の海洋生物の保護増殖という高い使命も担っている。これは、黒潮から新鮮な海流を直接パイプで導入できる沖縄ならではの立地条件と、30年間培った高度な飼育技術によるもので、学術的な観点からも国内外より高い評価を得ている。

海洋博公園の特徴は、「太陽と花と海」というテーマに表現される沖縄の自然を、魅力的に提供している点である。景観面や施設のデザイン、利用のしやすさなど細部にまでこだわりを持つ。公園施設の構想や計画はわが国を代表する有識者や地元自治体関係者を含めた委員会で検討を重ねている。また、毎年毎月欠かさず行っている利用実態調査では定量的データだけでなく面接聞き取りを行い、利用者ニーズを的確に分析し、改善計画に反映させている。

北部地域への経済波及効果

海洋博公園が、実際に県北部地域においてどの程度の経済波及効果をもたらしているのかを、消費金額という観点から定量的に把握しようと、2005年度に利用者アンケートを行い地元金融シンクタンクに調査分析を依頼した。具体的には、海洋博公園への来園者が北部地域でどのような消費行動をとっているのかを、北部地域の図面を示して公園内で面接調査を行い、県の統計と同様に、1人あたりの観光消費額や観光収入を算出

区 分	沖縄県全体の 観光消費額 (A)		海洋博公園来訪者の 観光消費額 (B)		(B/A)
	1人あたり 消費額(円)	構成比%	1人あたり 消費額(円)	構成比%	
宿泊費	25,152	36	9,220	32	37%
交通費	8,855	12	6,088	21	69%
土産費	15,916	23	7,041	25	44%
飲食費	12,429	18	3,901	14	31%
娯楽費・その他	8,139	11	2,426	8	30%
合 計	70,491	100	28,676	100	41%

(注) 海洋博公園来訪者消費額は、北部地区において消費した額のみを抽出

表1 公園来訪者の観光消費額（北部地域）

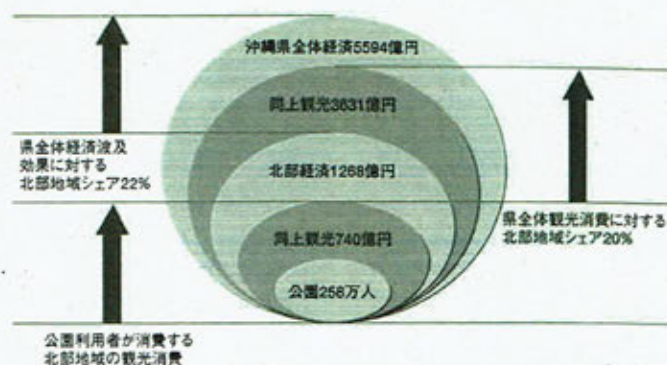


図2 海洋博公園がもたらす観光消費額と県全体への経済波及効果

した(N=858)。

結果、海洋博公園来園者の一人当たり消費額は28,676円と集計され、その内容は表1の通りとなった。この金額はグループ利用の場合、その代表の方に一人当たり消費金額として平均金額を聞き取ったものである。

沖縄県全体の消費額と比較すると、平均的な2泊3日または3泊4日の滞在期間中において、4割を北部地域で消費していることがわかった。飲食や入場料が3割と抑えているのに対し、交通費が7割を占め高い割合になっている。

この一人当たり消費額28,676円を2004年度の海洋博公園来園者数の258万人を乗じると、北部地域の観光消費額は740億円と推計される。この金額は公園が誘発しているものといえ、県が調査している観光消費額約3,631億円の20%に相当する。(図2)

さらに、北部地域のホテル、レストラン、土産品店などの観光施設が受け取った観光消費額740億円の一部は、農水産品など原材料の購入に当てられる(原材料等波及効果)。また、観光施設の従業員、原材料を供給した農家などはそれによって所得を得て、その所得が新たな消費を生むことになる(所得波及効果)。これらを合計した経済波及効果は1,268億円と推計される。

これに相当する沖縄県全体の経済波及効果は5,594億円なので、北部地域が約22%を占めている。これまでも北部観光が沖縄観光に占める経済的規模は約2割と推計されていたが、このような精度の高い推計が出てきたのはこれが初めてだ。これまで、利

用者の求めているニーズを展望し、さまざまな施設の充実により公園利用者を増やすべく努力を重ねてきたが、施設整備と管理運営を充実させることが北部地域の観光客増加と北部振興に直接結びつくということが明らかとなった。開園30年を迎えた節目の年にこのような結果が出て、これまでの取り組みの効果が裏付けられた。公園の強化は周辺地域に活力をもたらすだけでなく、沖縄県全体の所得の拡大、雇用の場の確保にも大きな効果を与えている。

これからの公園のあり方

公園の基本計画の更新

現在、海洋博公園が30年を迎えたのを機に、公園が果たしてきた役割や今後担うべき役割を踏まえた上で、長期的な公園計画のあり方を展望する、公園の基本計画の更新を進めている。

具体的には、公園の三大ゾーンのリニューアル方針を始め、利用満足度の向上、バリアフリー対策、国際化対応、環境保全・環境教育の強化、地域景観の保全、地域との連携強化など幅広い観点から各界の有識者や関係行政機関の参画を得て2年間のスケジュールで精力的に検討を進めている。今夏には基本計画案を公表しパブリック・インボルメントを経て決定するとともに、公園整備管理の予算要求に反映させていく方針である。

ここからは、特に沖縄本島の北部地域の観光拠点である海洋博公園が地域に果たす役割や、地域との連携方策について委員

会での検討内容や、公園独自に取り組んでいることについて紹介し、これからの公園のあり方を説明していく。

地域連携と持続的発展 (4つのキーワード)

海洋博公園を利用する300万人の観光客が北部地域で消費する金額を分析すると、交通費のシェアが高く、宿泊は中南部に戻ってしまう問題点に気づく。本島北部地域への観光客の滞在を増やし、豊かな自然の中で沖縄らしさを体験し、その利用を通じて、沖縄の環境保全を進めることが、持続的な地域発展には不可欠だろう。

公園を利用する300万人をいかに北部地域へ誘導するか、情報、資金、交通、人の4つのキーワードで考えた地域連携方策(次頁囲み参照)を、本年6月に北部地域の地方公共団体や環境団体に投げかけているところである。公園側の連携方策と地域側の連携方策を踏まえて、今後具体化を検討していく。

国際化

昨年沖縄へ訪れた外国人観光客数は9万人でピーク時(22万人)の半分以下だった。外国からの観光客が少ない理由として、物価が高い、遠い、言葉の通じないことが原因とされている。しかし沖縄は、その立地条件、気象条件を生かし、経済成長が著しい中国、台湾、韓国、東南アジア諸国などを意識した観光政策が必要である。このため、日本語はもちろん、英語、台湾語、中国語、韓国語の5ヶ国語によるホームページ、パンフレット、音声

34

具体的には、行政、各種団体、NPOなど環境保全活動を主催する団体が、ボランティアの協力を必要とするビーチクリーニング、やんばるの森の清掃活動、ヤンバルクイナのシェルター設置、サンゴの保全、赤土の流出防止など環境保全活動等の企画について事前に公

園に申請する。環境保全に効果があり、参加者が安全に活動できると認定されると、沖縄美ら海水族館チケットを事前に付与される。参加者はボランティア活動と引き換えに無料で水族館に入館できる。これまで、水族館を見て帰るだけだった利用者が北部地域をトラ

イアングル利用することになり、自然環境の保全と水族館の利用がセットになることで、持続的な環境の保全を図ることができる。また、新しいエコツーリズムのメニューとして、参加体験ツアーを北部から発信できる。

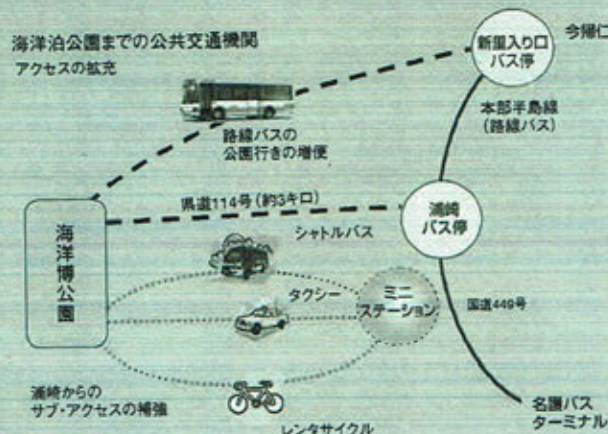
交通 北部公共交通網の活性化

公園利用者の移動手段はレンタカーが6割、次いで自家用車、貸し切りバス、タクシーであり、路線バスや船の利用は極端に少ない。年間300万人が利用する施設でありながら公共交通機関が発達していないのは珍しい。一方で、路線バスは経営が厳しく運行本数も少なくそれが原因で利用者が少ないという悪循環が生じている。離島へのフェリーも村営事業で行

っているが、離島への観光客の多くが沖縄美ら海水族館を利用しているが料金体系には割安感がない。

北部地域の重要な足である公共交通の利用者を増加させ、その経営安定化を図るためには、公園利用者が北部地域をバスやフェリーなど公共交通機関等で移動しやすくする方策から、北部地域の周遊と活性化、公園利用の利便性の向上が期待できる。

たとえば、各離島へのフェリー乗船券と沖縄美ら海水族館入場券とのセット化(相互割引)、名護—海洋公園間の路線バスの増便、高速バスと路線バスの接続の改善、浦崎等から公園までのシャトルの整備など公共交通アクセスの利便性の向上を図る。また、レンタサイクルセンターの設置、サイクリングコースの設定など交通手段の多様化、公園—ホテルシャトルの促進支援、ホテルシャトルの北部周遊化など民間事業とのタイアップなどにより、レンタカーを利用しない若年層、高齢者層、外国人客などの北部地域への誘引を促進する。



人—観光ガイド育成の支援

地元との交流や歴史文化に触れることは、観光客の満足度を向上するとともに、地域への理解と景観など地域観光資源の保全へとつながる。観光客ガイドの必要性は高いが、人材育成コストや質の確保が課題となっている。このため、ガイドに必要な基礎知識の提供や質の向上など、北部観光に関わる人材育成を公園が支援する仕組みを検討していく。

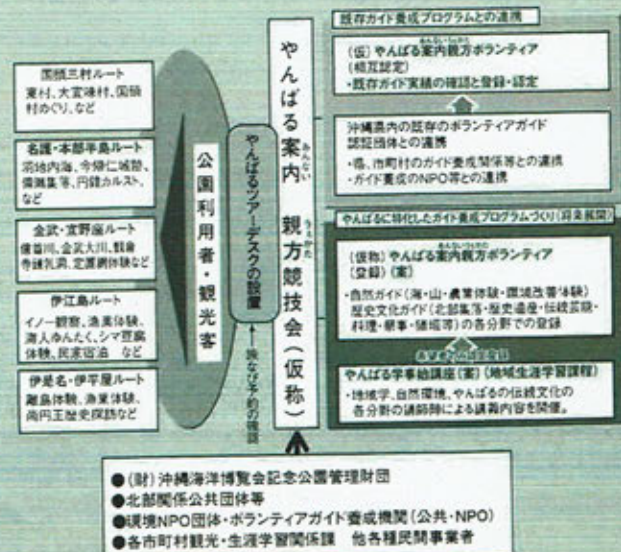
それには、北部観光ガイドの基礎知識等を提供する「やんばる学講座(仮称)」を開催しノウハウやホスピタリティ等の底上げを図ること、「やんばる検定(仮称)」など観光ガイドの共通資格制度を設けエコツーリズムのマナーなどを学ぶ機会を提供すること、「やんばる案内親方協議会(仮称)」などガイドのネットワーク化などが考えられる。

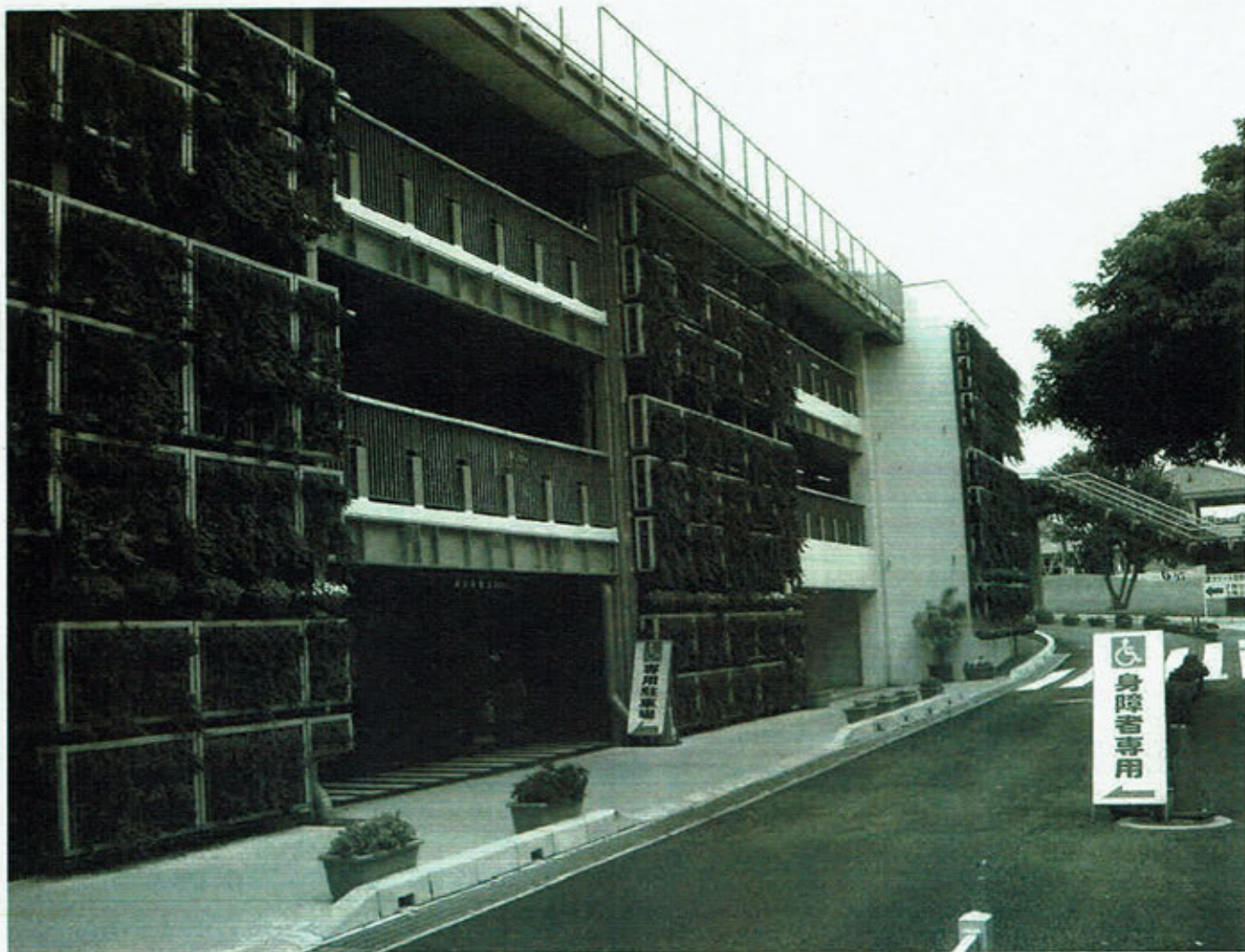
これらは既に一部の公共団体や観光協会などが先行して、観光ガイドの養成や認定、人材バンク制度、講座・講習会への講師派遣を実施している状況もあることから、個々の独自

性を生かしつつ、ゆるやかな連携ネットワークをめざすものである。

またこれが、沖縄の気候や暮らし方に惹かれ、興味と関心を持ち、沖縄へ移住してくる定

年退職者(団塊の世代)などの受け入れ窓口となることで、移住者が気づいた沖縄のよさを観光客に伝えていくとともに、沖縄のよさの保全に関わる仕組みを構築することも期待している。





立体駐車場の壁面緑化

沖縄美ら海水族館対策で駐車場を立体化したことを受け、景観対策、西日対策、アイドリングストップ対策として沖縄の土壌や廃ガラス材を活用した緑化工法を実施。緑の上に、花による演出も検討中である

ガイドシステムの導入作業を進めている。

今後こうした取り組みが公園から地域へ広がることを期待したい。海外からの観光客を増加させ、首里城にある万国津梁の詩に記されているように、かつて、450年間続いた琉球王国が東南アジア、韓国、中国、日本の架け橋となって、海洋文化や貿易の中継拠点として繁栄し独自の文化を築いたように、広くアジアの人々や文化の交流拠点として沖縄が繁栄できる日を待ちたい。

屋上緑化・壁面緑化の技術開発

2007年5月に安部内閣総理大臣は「今後6年以内に全ての国の庁舎において太陽光発電や屋上緑化を集中的に進める」と指示し、これを受け国土交通大臣も「必要な技術的支援を最大限行う」と発言した。

公園では4年前より建築物や立体駐車場の壁面緑化・屋上緑化の技術開発を進めている。観光都市をめざす一方、コンクリート構造物が多い沖縄で、屋上・壁面緑化を普及させ景観向上と観光促進を図ること、亜熱帯の強烈な陽射しを和らげ空調エネルギー消費量を軽減させ環境改善と地球温暖化対策に寄与することが目標だ。具体的な技術は、豊富にある未利用資材（国頭マージと廃ガラス材）を緑化材と活用し、低コストで既存建物の屋上・壁面緑化、産業振興を図ることが目標だ。

技術開発を本公園が先導的に行い、屋上・壁面緑化の標準仕様を作成することで、沖縄県全体へ普及・展開を図ろうとするものである。これまでの実験で、一定の配合比ならば灌水不要でも良好に植物が育つことや、

屋上防水層を根が傷め緑化に適さない植物種も判明した。こうした知見を整理して地域へ発信し、沖縄での屋上・壁面緑化の普及・推進に努めていきたい。

沖縄らしさ

本公園に届く感謝の手紙が最も多いのは、おきなわ郷土村である。4万平方メートルの敷地に琉球王国時代から明治期までの8棟の民家と御嶽、神アサギ、水場、高倉、サーター家など、沖縄の昔の村落の成り立ちを紹介している。

このうち地頭代の家では、地元のおじいやおばあがNPOとして手づくりのお茶菓子を提供するとともに三線やカチャーシーなどの踊りを観光客に無料で教えてくれる。遠慮がちな観光客が、「御茶いかがですか。」と誘わ



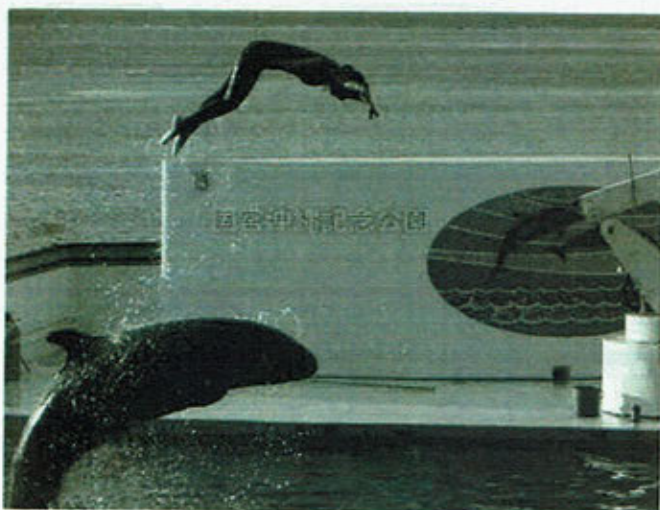
おきなわ郷土村

琉球王朝時代から明治期までの民家などを再現。地頭代の家では、地元のおじやおばによるお茶菓子のおもてなし、三線や踊りを無料で教えてくれるのが好評。外国人にも喜ばれている



海岸遊歩道

潮の干満によるイノーの変化が楽しめる。伊江島や水納島の眺望も素晴らしい。干潮時にはイノーに降りてウニ、ナマコ、サンゴなどの豊富な海洋生物を観察することができる



オキちゃん劇場

年間85万人の利用があるイルカのショー。ミナミバンドウイルカやオキゴンドウの豪快なジャンプや飼育員とのふれあいが人気。海とプール水面が視覚的に一体化しており、海上をイルカがジャンプしている錯覚になる



イルカラグーンにいる人工尾びれのフジ

30年近く飼育しているイルカ。ジャンプは上手ではないが3頭の子をすみびくマザーと呼ばれる。尾びれが壊死する例になったが、獣医がブリヂストンに交渉し世界初の人工尾びれプロジェクトがスタート。7月から映画「ドルフィンブルーフジ、もういちど宙へ」で全国公開された。沖縄の美しい風景とともに感動的なドラマは高い評価を得ている

れ、座敷に上がると「三線を弾いてみませんか」と勧められ、教えてもらっているうちに、いつの間にか輪になってカチャーシーを踊っているという思いがけない展開と温かいふれあいが、利用者に深い印象を与えている。

沖縄のまちづくりは風水思想の影響もあって遠くに見える岬や島などの景観を大切にしている。公園の景観設計においても、海に浮かぶ伊江島を意識して中央ゲートや沖縄美ら海水族館の設計を行っており、多くの利用者が写真を撮るポイントとなっている。

沖縄の魅力は、眩しい夏、サンゴ礁が長年月かけてつくり上げたイノー（礁池）とエメラルドの美しい海、白い砂浜であろう。毎年160ヘクタールもの海岸が失われていく本土に対し、イノーで守られた沖縄の海はコンクリートの海岸構造物は不要だ。潮の干満で

変化するイノーは多様な生物の生息環境となり生態的にも優れ、観光客にはエメラルド色の海の感動を与え、かつ、防災上高い効果がある。イノーの恩恵を受けている沖縄は、その保全を図り、沖縄らしさを持続していく必要がある。公園では海岸遊歩道の整備と環境プログラムの準備を進めている。

環境教育の拠点

公園利用を通じて、環境を理解し行動する環境活動や環境教育の拠点となることが大切である。沖縄美ら海水族館は、世界の水族館と遜色のないよう環境教育機能や調査研究機能を高める必要がある。また、世界初の人工尾びれプロジェクトであるイルカのフジが注目され評価されているように、野生生物と人間との関わりや人間の役割を考え、悪化しつつある

海洋環境の保全や野生生物の保全のための具体的行動のきっかけとなるよう環境教育の拠点を目指していくことが求められている。

人間は生態系の一部で、生態系が壊れば人間にも影響する。また、人間は一人では生存できない共同体で、豊かさの追求が他の豊かさを損なってはならない。豊かな生活は、物質的な豊かさだけでなく生命や健康という人間の基本が前提だ。多様なライフスタイルを志向しつつも、地球市民として行動すべき時代だ。

今後とも、魅力ある空間整備と充実した管理運営により、多くの方に利用されるよう努力し、産業の育成や雇用の確保を通じて、持続可能で魅力的な地域づくり、環境保全、地域経済振興、沖縄観光に貢献していきたい。